

保育における「環境構成」に潜む課題

渡部（君和田）容子

Yoko WATANABE (KIMIWADA) :

Hidden Problems in “Creating Proper Environments” in Nursery Education

幼稚園や保育所における指導計画立案に際して、「環境構成」は不可欠であるが、学生のみならず経験のある保育者にとっても「環境構成」は難しいという。本稿では、従来研究的にとりあげられることのなかった保育者たちの「環境構成」に関する素朴な疑問や悩みが、実は、指導計画立案上の課題にとどまらず、幼児教育のカリキュラム編成や指導といった保育の本質的な問題と関係し、かつ自覚しにくい問題構造であることを論じた。

キーワード：環境構成 環境を通した保育 指導計画 研修 指導

はじめに

保育学生に指導計画の立案を指導する際に、「環境構成」についての理解が難しいことは、保育者養成にあたる立場でよく経験することであるが、中堅あるいはベテランの保育者にとっても「環境構成」のかき方が難しいということをししばしば耳にする。それは、文章表現や書式の問題であることも少なくないが、より本質的なカリキュラム編成上の問題や、保育の原理に関わる問題を含んでいる。

従来、国のカリキュラムの基準文書である「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」が改訂されると、その解説がなされ、保育者はそれらを学び、自らの実践を見直してきた。一方で保育者は、カリキュラム編成において極めて広範で自由な裁量が与えられているにもかかわらず、指導計画に具体化する力量をいかに形成していくか、その方法が手探り状態である¹⁾。それ故に、実践の側から基準文書を見直す発想が弱いのではないかとの危惧を抱いている。

研究的にも、もちろん「幼稚園教育要領」や「保

育所保育指針」への各種の理論的批判は行われてきたが、忠実にそれを実践しようと努力したうえでの保育者の悩みやつぶやきが取り上げられてきたとは言いがたい。

本稿では、その指導計画の中で、とりわけ問題となる「環境構成」をとりあげ、保育者の感じる困難さが、単に指導計画のフォーム・書式の問題なのか、カリキュラム上のどのような課題と結びついているのかについて考察する。

なお、本稿では、特に断りのない場合、指導計画とは幼稚園および保育所における指導計画を指す。また、論じるのは保育内容の領域「環境」ではなく、保育のための環境設定である「環境構成」ないし保育を取り巻く一般的な「保育環境」である。

1 保育者の感じる「環境構成」の難しさ

(1) 幼稚園教諭10年目研修から

筆者は、T県主催の平成18年度「幼稚園教諭10年経験者研修」プログラムの「環境構成」の講師を受け持った。指導計画の具体的な立案についての研修

は既に済み、より広く「環境構成」について終日、講義および演習をして欲しいとの県教育センターからの依頼であった。

今回は、他の「表現遊び」「絵本」「道徳性」とあわせて4つの研修内容から1つを選択する形式であったが、「環境構成」への参加者が一番多かった。一連の研修プログラムの中で、既に全員が「環境構成」についての研修を受けているとのことだったので、更に同一のテーマを選択し研修を受けたいとの希望が多いのは意外でもあり、それだけに「環境構成」に日々保育者が悩み研修ニーズが高いことを感じた。

さて、一定の予想された保育活動を前提とした指導計画の中での「環境構成」ではなく、指導計画立案を離れたところでの「環境構成」の一般的な問題とは何であろうか。少なくとも、いわゆる10年目研修を受講する幼稚園教諭、保育者は何をイメージして「環境構成」の研修に参加するのであろうか。

研修内容選択にあたって参加者が書いた「講座についての自己の課題・指導を受けたい内容等」には、「環境構成」について次のような記述が見られた。多岐にわたるが分析のために引用したい(順不同)。

- ①子どもたち一人ひとりが今何を求めているかを知り、表面的な興味や要求だけにとらわれず、その遊びの中で子どもが発達に必要な経験を積み重ねていくことができる環境。
- ②生活や遊びの中でのルールを守り、仲間関係を深めながら集団や仲間との遊びをよりスムーズに展開していきける環境。
- ③みんなが一緒に遊んだり、生活する楽しさを味わうことができる環境作り。
- ④子どもの作品をより良く見せる為の掲示の方法等。
- ⑤自然環境をどう活かしていくのか。
- ⑥教師が環境設定しても、子どもたちと一緒にそれを再構成していくための援助、工夫の足りなさを感じている。共に構成するためには、どのようにしていけばよいのか具体的に学びたい。

⑦行事に向けた環境構成になりがちであり、年間を通して教育課程にそった構成をしていくためには、どのような配慮が必要なのか指導を受けたい。

⑧実体験（農作業や飼育活動、調理、運動など）をさせたいため、いろいろな活動を取り入れているが、安全面との兼ね合いが難しいと感じることが多い。

⑨3歳児の子どもたちが自己発揮をするための人的・物的な環境作りで、配慮すべき点は何か？

⑩いろいろな物に敏感に心を動かせるような豊かな感性を身につける為には、また、子どもがそれらをのびのびと表現するには、どのような環境構成が必要となるのか？

⑪子どもたちが自分で考え、行動するという主体的に遊びや活動を楽しむ為には、どのような点に気を付けて、環境構成を整えていったらいいのか？

⑫3歳児の子どもたちが、思わず触れてみたくなる環境や、遊びが発展するような環境構成の工夫。

⑬近年、…(中略)…感情のコントロールができない、遊べないといった子どもが多くなってきているが、人的環境としての保育者が配慮すべき点は何か？

研修の講座は、講義と協議、演習の3部から成っていたが、協議の時間に、あらかじめ提出した上記の「自己課題や受けたい指導」として書いたことを、日々の実践のどのような場面から出てきた疑問なのか、どのような取り組みを行って出てきた課題なのかを各々説明し話し合ってもらった。さらに演習では、各園の教育課程、ハード面の環境を示す絵図、環境構成に苦心した指導計画等を持ち寄って事例研究をした。

その詳細を述べることは本稿の目的ではないが、1日の講座ではあったが、各園の様子、個々の保育者の実践と問題意識はおおよそ把握できた。公立園、私立園、キリスト教保育、街中、郊外の立地等々園の状況は様々であり、保育者の個性も魅力もそれぞれ違っていたが、共通していたことは、参加者は中堅の保育者として活躍中で、保育技術につい

ては得意分野はあっても特に苦手意識はないこと、実践における課題や困っていることは一様に「環境構成」に深く関係している、「環境構成」に原因があるという捉え方をしていることであった。

(2) 「環境構成」に集約され分節化されない諸問題

ところで、通常の指導計画の書式においては、時間軸・環境構成・子どもの活動・保育者の活動と留意点という構成になっているので、保育学生に指導計画の立案を教える際、「環境構成」とは、保育の場所と大道具・小道具だと筆者は教えている。授業では、遊びの細案や絵本の読み聞かせ・給食指導などの部分指導案をとりあげることが多いのだが、その保育を何処で行うのか、何をいくつ用意し使うのか、片付けるのかを時間軸にそって図も使いながらかき入れるのだと説明している。

これは、ある予定された保育活動において、保育者が利用可能な物的資源、言い換えれば意図的に構成可能な環境に限定して「環境構成」を行うという前提を持っている。

しかし、前述の10年目研修参加者が書いた①から⑬は、非常に広範囲のことがらが「環境構成」として述べられている。指導計画上の環境構成の問題（例えば⑥⑦）もあれば、壁面構成など日常的な保育室のレイアウトに関すると思われるもの（④）、子どもの安全管理（⑧）、人的環境（⑨⑬）までもがその中に含まれている。

その他、子どもの発達にとって必要な環境（①）、ルールや仲間づくりを育める環境（②③）、自己発揮や楽しさを味わえる環境（③⑨⑩⑪⑫）、自然の活用（⑤）などは「環境構成」と一般に考えられている問題であるが、それらは保育の全体的課題であって、「環境構成」のみを工夫して解決する問題、達成できる課題ではない。

研修講座に限らず、それは「環境構成」の問題ではなく、保育内容の選択や指導方法の問題だと本来分節化して考えるべきことも、保育者は「環境構成が難しい」と表現しがちであることに着目したい。

これはどのような原因によるものであろうか。

2 「環境構成」「環境を通した保育」の強調

(1) 「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」の考え方とその流布

現行の「幼稚園教育要領」²⁾「保育所保育指針」³⁾が、前回改訂以来ともに「遊び」を通した保育に価値を置き、そのための「環境構成」を重視し、保育者の指導ではなく「援助」を強調していることは言うまでもない。

「幼稚園教育要領」では、総則において「幼児教育は、学校教育法第77条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と述べられ、「保育所保育指針」では、総則の「保育の原理」で、「保育の目標」、「保育の方法」に並んで、特に「保育の環境」が取り上げられている。

「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」を解説した書物では、小学校以上の教育と幼児教育、保育の違いとしてさらに強調されることが多い。例えば、『環境による保育』という基本原理が、直接的に教育内容を子どもに授けるという学校教育の方法とは大きく異なる点です。すなわち、保育では『ねらい』や『内容』を環境の中に潜ませ、乳幼児が環境に主体的、意欲的にかかわることによって、『ねらい』や『内容』が達成され、発達に必要な経験が得られるようにするところに特質があるわけです。⁴⁾

(2) 広すぎる定義

保育者養成用のテキストとして編集された図書を一例に見てみよう⁵⁾。以下の論述は『幼稚園教育要領解説』や各種の保育事典をもとに書かれていることから、保育者養成では普遍に行われている解説である。

「環境を通して行う教育」の章で、「保育環境の要素」として、「家庭・園・地域の建物・設備、遊具・

教具・玩具など子どもの身近な環境をはじめ、飼育・栽培されている動植物、山、川、池、海、湖沼、雲、太陽、月、星、水、大気、光、気候、季節などの自然環境、絵本、紙芝居、テレビ、ビデオ、ゲーム機、パソコンなどの広く社会文化情動的なものも含めた物的環境が考えられる。また、子ども、保育者、友だち、親やきょうだい、近隣の人々や、それらが形成する人間関係・集団、そのなかにおける社会的な役割、またそれらが作り出す雰囲気や意識、価値観などを含めた人的環境や、時間・空間、さらには、さまざまな環境の要因が絡み合いながらつくられる状況」等を挙げ、「広義の保育環境は『生活』と同義と考えてもよいであろう」と述べている。なんと広範囲におよぶ事柄、子どもを取り巻く「全て」と言ってよい列举に驚かされる。

(3) 環境構成に限定されたかのような保育者の役割

前掲書は、これら広義の保育環境の要素のうち、「主体としての子どもの相互交渉を前提として、1人ひとりの子どもの育ちにとって『意味ある環境』」が「保育環境」であり、したがって「保育環境は1人ひとりの子どもにとって異なるもの」であり、「保育者はそれを1人ひとりの子どもの側から理解しなければならないのである」と述べている。そして、これは努力目標ではない。

「保育環境の意義は、それが1人ひとりの子どもの興味や関心、能力や可能性を引き出しながら、子どもの主体性や自主性、自発性の形成を図ることにある。」ので、保育者の役割は、「環境に潜む保育的価値を見出していくことが必要」であり、「保育内容は環境のなかに隠れているのであり、保育者にはそれを見出す力量が必要なのである」と続く。

保育者の子どもへの直接的な働きかけ、指導ではなく、広範囲な「保育環境の要素」の中から「意味ある環境」を保育者が見つけ出し、その「意味ある環境」すなわち「保育環境」こそが、子どもの興味、関心、能力、可能性を引き出し、子どもの主体性、自主性、自発性をつくるのだという論理である。

「環境を構成するときに留意しなければならないことは、子どもにとっては興味・関心を持つような『応答的』な環境が必要です。例えば、『ままごとセット』を準備してあるが女の子にとっては、おかあさんごっこを始めたいとかままごとをしたいという欲求を持つが、男の子には『ごっこ』をしたいという意欲に結び付かないことがあります。そのようなときに女の子と『ままごとセット』の間には相互の関係が生じて女の子とままごとセットの間には『応答的』環境を生じたといえます。」「ねらい」にふさわしい『内容』のために子どもの能力に応じた『応答的な』環境を工夫するということです。」⁶⁾と「『環境の構成』欄の記入作成について」具体例が解説してあるテキストもある。

また、初期の環境構成のみならず、「保育は予想外の展開となることが少なくないので、子どもの活動に添って、つねに子どもを取り巻く人的・物的環境を吟味し、子どもがより意味のあるものを見出すよう、環境を再構成していくことが保育者の役割である。」⁷⁾と更に述べているテキストもある。

3 「環境構成」に隠れる課題

(1) 「指導」と「援助」

学生が持ち帰った保育実習日誌の赤ペンが入った箇所を見ると、子どもたちに「～させる」と書いた文章がすべて「～するのを援助する」に直されているという経験が多々あった。なるほどと思う場合が大半ではあったが、また首をかしげたくなる場合も少なくはなかった。何より、赤ペンといっしょに「指導はいけない」というメッセージを学生が受け取っていることを危惧した。

保育者の環境構成の悩みも、指導や援助といった子どもたちへの働きかけを「環境を通して」と考えることから増える側面がある。さらに、近年カウンセリングマインドの必要性が強調されることから、「指導」よりも「受容」がまず大切と、保育者の頭にはあるだろう。

しかし、心理学者の茂木俊彦は、受容と指導の統一について、次のように述べている。「子どもたちをあるがままに受け入れるということは、子どもたちが感情のおもむくままにいろいろな行動をしたり、乱暴な言葉を吐いたり、友だちとの関係でするいろいろな振る舞いがあるがままに認めるといったことにとどまらないのです。自覚はしていないかもしれませんが（とりわけ幼児などは）うまくいかずに悩んでいる、そうせざるをえなくてそうしてしまっているその状態、とくに内面の、非常に矛盾し葛藤している状態をも含んで、ある場合は冷静に、ときには大人として子どもに対する愛情に裏打ちされた気持ちでもって、しっかりと見極め、そういう状態、そのようにならざるをえない気持ち、そのようにせざるをえない行動のパターンを、しっかりとその子にそって理解することこそが肝心なのです。」⁸⁾

そして、臨床心理的カウンセリングと比較して、「でも保育者や学校の先生が子どもを受け入れる、受容するためには、ただ『この子はこういう状態なんだ』『心のなかでこう思っているのではないか』という理解にとどまっていなければならないと思います。実践的に子どもに働きかけて、子どもがどんな感情を表現してくるのか、どんな行動をするのか、どんな言語表現をするのか、そして子ども自身がどういうふうに変っていくのか、なにか堅い部分をもって、なかなか変わっていかない部分があるのではないかとことまで含めて、働きかけとの関係で反応してくる子どもたちの姿をしっかりと受け止め、それをあるがままに受け入れていくことが必要です」⁹⁾

茂木は、「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」についても次のように言及している。

「改訂された保育指針や教育要領を読んだ限り、子どもや集団に対していろいろ教えたり、指導するということが非常に消極的に位置づけられているという印象をもちました。環境を整えることによって子どもが自発的に、自主的に活動することに期待するという考え方にに基づき、保育者、教師の役割はそ

うした子どもたちを側面から支えるという構造で書かれているというふうに思いました。ですからこれは指導の軽視のしすぎであり、子どもの自発性とは何であるか、能動性とは何であるかについて、じつに理解が行き届いていないのではないかと思ったわけです。」¹⁰⁾

(2) 教材研究

環境構成の見本としていわゆる「コーナー保育」が保育のハウ・ツー本や雑誌にはよく登場する。ままごと、ブロック、積み木、絵本、お絵かきなどの玩具や道具、材料などを揃えたコーナーを作り、子どもに遊びを選ばせるという手法である。また、このコーナー保育への批判も多々あった。

再び茂木の言葉を引けば、「人間関係を深め、自然や文化の環境を整えば子どもは活動するか、というところではないのです。」「やはり人間関係を基礎にしながら自然に目を向けさせる指導というものが重要です。そこに自然がある……だけでは教材にはならないということです。」¹¹⁾それ故、保育者自身の教材研究が重要であるとの論旨である。

いま、この指摘がさらに大切なのは、幼小連携が幼児教育にとって従来以上に重要になってきているということがある。平成17年1月27日付けの中教審答申¹²⁾でも、「小学校教育との連携・接続の強化・改善」が強調されている。小学校教員には、保育者の援助や環境への着眼と、個別の子どもへの着眼を取り入れて欲しいところである¹³⁾が、保育者は環境構成と指導の前提としての教材研究を積極的に取り入れることが必要ではなからうか。

おわりに

以上みてきたように、保育者が「環境構成」の課題と捉える問題は、純粋に「環境構成」のみに関わるものではない場合が多い。むしろ、保育全体、多くは子どもたちへの保育者の働きかけ、援助や指導のあり方に関わるものである。

しかしながら、保育者が「環境構成」に困難を感じるのは、現行の「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」、およびその解説書によって「環境を通した保育」が強調されるあまり、問題の所在を分節化して考えること、とりわけ教材研究を含む「指導」の問題として捉える視点が非常に弱くなっていることが指摘できよう。

また、「環境構成」の問題として広く捉えた場合、所与の資源ではあるが保育者が意図的に構成できない要素、また、評価が困難で工夫しても効果はかれない要素をどのように扱うのかという問題も、保育者の悩みには含まれているだろう。これらの問題については別稿としたい。

註

- 1) 拙稿「保育指導計画の意義と指導計画の立案指導」『鳥取短期大学研究紀要』第53号, 2006年参照。
- 2) 文部省「幼稚園教育要領」(1998年12月)。
- 3) 厚生省児童家庭局「保育所保育指針」(1999年10月)。
- 4) 森上史朗『新しい教育要領・保育指針のすべて』

フレーベル館, 2000年, p. 37.

- 5) 塩美佐枝編著『保育内容総論』同文書院, 2003年, pp. 78-79.
- 6) 枋尾勲他『指導計画記入事例集—新保育所保育指針による基準カリキュラム—』ひかりのくに, 2005年, p. 14.
- 7) 伊藤良高他編著『現代の幼児教育を考える(改訂版)』北樹出版, 2005年, p. 53.
- 8) 茂木俊彦『受容と指導の保育論』ひとなる書房, 2003年, p. 97.
- 9) 前掲書, pp. 98-99.
- 10) 前掲書, p. 106.
- 11) 前掲書, p. 107.
- 12) 中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」, 平成17年1月28日.
- 13) 拙稿「『カリキュラム連携』への道のり」志木教育政策研究会『市民と創る教育改革』日本標準, 2006年参照.